

1. 自己免疫性膵炎とは

本来人間には、異物を排除するために免疫機構が働いています。この免疫機構が正常に働いていれば、自分自身を攻撃することはないのですが、何らかの原因により自分自身の免疫機構が自分自身を異物として認識し、攻撃してしまうことがあり、これらの病気を自己免疫疾患あるいは膠原病と言います。自己免疫性膵炎は自己免疫病のひとつで、自分自身の免疫機構の異常により膵臓に炎症が起きて膵臓が腫れる病気です。

2. 自己免疫性膵炎の患者さんはどのくらいいるのですか？

2002年の調査によれば、自己免疫性膵炎の患者数は人口10万人あたり約0.7人と推定されています。

3. 自己免疫性膵炎はどのような人に多いのですか？

自己免疫病は一般的に比較的若い女性に多い病気ですが、自己免疫性膵炎の場合、60代から70代の男性に多く見られます。

4.原因は、为什么呢？

現時点で何らかの免疫機構の異常で起こると考えられていますが、はっきりした原因は不明です。

5. どのような症状がでますか？

症状としては、膵が腫れることによって、胆汁の流れる道である総胆管を圧迫して起こる黄疸症状が最も多い症状だと言われています。具体的には、尿の色が濃くなってきたり、皮膚の色や白目の部分が黄色くなったり、便の色が灰色になってきたりします。また、全身のだるさや体重減少なども見られます。更には腹痛や糖尿病の急激な悪化なども症状としてあり、これらの症状は膵臓癌の症状とも共通しています。更に自己免疫性膵炎は、膵臓以外の臓器にも炎症が見られますので、顎の下や眼の内側が腫れたりすることがあります。

6. どのように診断するのですか？

自己免疫性膵炎を診断するためにはCT検査やMRI検査を行ったのち、内視鏡的逆行性膵管胆管造影検査(ERCP)が必ず必要となります。自己免疫性膵炎

患者様の膵管は糸のように細くなっていることが特徴のためです。これらの変化は、CT や MRI ではなかなか分かりません。黄疸のある場合には画像検査で胆管がつまっているかどうかを確認し、胆管が閉塞している場合（閉塞性黄疸）には、胃カメラを用いて胆管に管を挿入し治療します。自己免疫膵炎を診断する上で最も重要なことは膵臓癌と区別することです。なぜなら膵癌は非常に予後の不良な病気であり（詳しくは膵癌の項目を参照してください）、一方自己免疫性膵炎は良性の病気であり、副腎皮質ステロイド薬で大部分が治療可能であるからです。

また、血液検査で免疫グロブリンの一種である IgG の増加がみられます。IgG には 4 種類あり、その中の IgG4 が増加するのがこの病気の特徴とされています。この値を測定するのに今のところ健康保険がききませんが、当科では必要と考えられた患者様に対して患者様の負担なしに IgG4 を測定し、正確な診断を行っています。

6. この病気にはどのような治療法がありますか

90%以上の患者さんに副腎皮質ステロイド薬が有効です。最初、比較的大量を投与して、それから次第に量を減らしていきます。量が少なくなれば、後は外来で血液検査や CT やエコーなどの画像検査をみて量を調節します。しかし約半数で再発が報告されており、長期的な外来通院が必要と考えます。また副腎皮質ステロイド薬を使用することによって糖尿病が悪化したり、骨粗しょう症が発症する場合がありますので同時に治療を行います。